

村上春樹

「バースデイ・ガール」における繰り返しのレトリック

東 海 義 仁

一 はじめに

「バースデイ・ガール」は、平成二八年度中学校用『伝え合う国語 中学国語3』（教育出版）の三年生に掲載され教科書教材にもなっている、村上春樹の短編作品の一つであり、教科書に掲載されて日が浅いこともあって本作品の教材としての研究は不十分である。

深津謙一郎氏は「あなたはきつともう願ってしまったのよ」という彼女の台詞から「『僕』もかつて『あとになって思い直してひっこめることはできない』類の願いごとを『ひとつだけ』選んだ結果、今こうあるのだ、と。にもかかわらず、『僕』がそのことを思い出せないのは、『僕』がその起源（の選択）を想起しなくてよい程、今に不満を感じていないからである」と「僕」について解説して、老人については「彼女の話聞いたあとの事後的な視点から、『何かのめぐりあわせ』というマジック・ワードで必然化してみせた」ことを指摘する²。大木志門氏は「僕」が人生の「一回性を無自覚に生きてきた」存在であることと「人生の選択を迫られた」存在

である彼女の対比、そしてその「人生の一回性」を「それ自体が呪い」である可能性を指摘する⁵。

しかし、深津氏も大木氏もそれぞれ「僕」についての指摘が行き過ぎている。「あなたはきつともう願ってしまったのよ」という彼女の台詞の通りに解説しても、「僕」が今に不満を感じていないことは明らかにはならず、そもそも彼女との対比という点のみで「僕」が人生の「一回性を無自覚に生きてきた」存在であると導き出すのには無理がある。本作品は空白が多数存在しているため、その可能性を示すこととはできても、断定するためにはあまりにも情報が足りないため、彼女の願いごと一つとっても特定することに意味はないだろう。本稿では、西田谷洋氏が指摘するユーモアを用いた解説を踏まえながら、これまで見落とされていた作品内に存在する類似したレトリックについて指摘をしつつ、老人の発言を受け取ったことで変化が生じた彼女が、二十歳の誕生日から数十年後に「僕」とやり取りをする中にも変化が生じる可能性があることを確認する。

また、本作品の最後に老人の台詞が再挿入されることが強調することも明らかにする。

二 繰り返しを示唆される場面①と場面②

本作品には三つの場面が存在する。一つ目は彼女が老人に願いごとをする場面(場面①)、二つ目は彼女と「僕」が話し合っている場面である(場面②)。この二つの場面は彼女の過去の出来事を再構成して語られた場面である。三つ目は老人の台詞が挿入されている場面(場面③)、ここでも老人そのものは語り手になっていない。

場面①では彼女と老人のやり取りが中心に描かれ、場面②では彼女と「僕」のやり取りが中心に描かれているため、一見別々の出来事のように受け取れる。

深津氏は「そもそも、彼女が二十歳の誕生日の夜にアルバイトをしたのも、老人の部屋に夕食を届けたのも、ともに偶然だった点に留意したい。その日彼女が店に出たのは、彼女の代わりに店に出てくれるはずだった『もうひとりのアルバイトの女の子』が『風邪をこじらせて寝込んでしまった』ためだったし、老人の部屋に夕食を運んだのは、普段その仕事を任されているフロア・マネージャーが、急な激しい腹痛に襲われて病院に運ばれたためだった。そうした偶然の積み重なりを、老人は彼女に出会い、彼女の話を聞いたあとの事後的な視点から、『何かのめぐりあわせ』というマジック・ワードで必然化してみせたのである」とし、老人があくまで偶

然だった彼女との出会いを必然化したことに注目する。

確かに老人の語りは偶然を必然のようにしているが、厳密に言えば老人が「マジック・ワードで必然化してみせた」のではなく、彼女の心持がそうさせたのである。

彼女は「僕」に「二十歳の誕生日なんだから、少しくらい普通じゃないことがあつた方がいいじゃない。」と述べており、この台詞から彼女が二十歳の誕生日を特別なものにしたかったという思いが読み取れる。そうした彼女の心持は、老人の偶然を必然としようとする語りとマッチし、結果的に「それは実際に起こったことだし、たぶん大事な意味を持つこと」であると「僕」に語るまでに至る。

注目したいのは、場面①で見られる偶然を必然のように語る老人のレトリックが、場面②においては些細な事を大事な意味を持つことと語る彼女のレトリックとして描かれていることである。

西田谷氏は、「『それは実際に起こったことだし、たぶん大事な意味を持つ』と発言するように、彼女は願いに現在も囚われている。彼女は願いを想起するたびに、願い以外の人生の選択肢を消去したものとして自分の人生を顧みてしまう。自分以外にはなれないという発言からは、願いの反復として人生を送ることへのあきらめと充実、反復から逸脱し自分以外になることへの憧れと忌避の両面が解釈できる。」として彼女が現在も二十歳の誕生日にした願いごと⁽⁶⁾に囚われていることと、それを基準にして自分の人生を捉えてしまう彼

女の在りようを主張する。

西田谷氏のいうように、場面①から場面②にかけて彼女は変化している。彼女は常に二十歳の誕生日の出来事を起点に現在の人生を捉えるようになっており、自分が二十歳の誕生日にした願いごとの結果として今の生活があるのだと考える。

しかし、西田谷氏が「彼女は老人の言葉を『真に受けたわけ』ではない。彼女は老人の発話を半ば否定している。しかし、記念日に彼女は、あえて老人の発話を『ユーモア』として受容する。」と述べているように、彼女はあくまでも老人の台詞をユーモアとして受け取ったのだと考えられる。

彼女がユーモアとして受け取った理由は「二十歳の誕生日なんだから、少しくらい普通じゃないことがあつたつていいじゃない。」という彼女の台詞に表れている。

数日前にボーイフレンドと深刻な喧嘩をして「たいしたことではないこと」が「深刻な喧嘩」になり「それまで二人を繋いでいた絆が致命的に損なわれてしまったという感覚」さえしてしまった彼女は、老人の偶然を必然のように語ることに心当たりがあり、「そう思わないかね？」という質問に頷いてしまう。また、老人が彼女にとって立場が上の人物であったことも、質問に同意の頷きをしてしまった要因にはなるだろう。

場面①では、老人の偶然を必然のように語るレトリックに同意をしてしまう彼女が描かれているが、場面②において同

じように些細な事を大事な意味をもつことと語る彼女のレトリックに「僕」は同意をしない。彼女が「僕」に同意を求めた部分では「僕らはひとしきり黙りこんで、それぞれの飲み物を飲み、それぞれにたぶんべつのことを考えている。」と語られており、頷いてしまった彼女とは反応が違う。

このように場面①では老人が彼女に、場面②では彼女が「僕」に同じように同意を求めていることが確認できる。その同意への反応に違いがあることが指摘できる。

また、ユーモアに注目すると、場面②においても彼女は「僕」に「『そういうステッカーも悪くないな』」というユーモアを言われている。場面①から②にかけて、ユーモアを受け取ったことよって変化してしまった彼女が描かれていることから、場面②で同じように「僕」のユーモアを受け取った後に彼女が変化する可能性が「彼女は声を上げて楽しそうに笑う。それで、さっきまであったひからびた微笑みの影はどこかにふっと消えてしまう。」という一文で示唆される。

彼女の変化を確認することはできないため、あくまで可能性が示唆されているという指摘になるが、場面①と場面②で繰り返しがみられる部分がある以上、意図的に彼女が変化する兆候とも解釈できる一文が描かれていることになるのではないか。

三 自由間接話法からみる場面③

次に自由間接話法を用いて場面③を分析してみる。

橋本陽介氏は自由間接話法を「語り手の語りでありながら人物の声が同時に含まれていると感じられる文である」としている。場面③において挿入されているのは意図的に挿入された「老人」の台詞であるため、この自由間接話法の形態であると分類できる。老人が語り手となっているわけではなく、老人の台詞を用いて語り手が代弁している。

西田谷氏は、エコー発話という概念を導入しながら「老人の問いかけの場面の③でのエコーは、彼女のこれまでの人生を縛ってきた制約の力を示すと共に、そうした制約に対する彼女の否定をも喚起しよう」と、場面③に両義的な可能性を見出す。

では、場面③において老人の台詞が挿入されることにはどんな効果があるのだろうか。この場面は単純に老人の台詞が挿入されているのではなく、意図的にそれが編集されているという特徴があるため、それを踏まえて分析を行う必要がある。

場面③の「『しかししたつたひとつだから、よくよく考えた方がいいよ。可愛い妖精のお嬢さん』。どこかの暗闇の中で、枯れ葉色のネクタイをしめた小柄な老人が空中に指を一本あげる。『ひとつだけ。あとになって思い直してひっこめることはできないからね』』という記述と似たような記述が場面②にあり、場面②では「『こうなればいいという願いだよ。お嬢さん、君の望むことだ。もし願いがあれば、ひとつだけかなえてあげよう。それが私のあげられるお誕生日のプ

レゼントだ。しかししたつたひとつだから、よくよく考えた方がいいよ』、老人は空中に指を一本あげた。『ひとつだけ。あとになって思い直してひっこめることはできないからね』という記述になっている。

場面③においては「可愛い妖精のお嬢さん」「どこかの暗闇の中で」という言葉が基になる部分に付け加わっており、「枯れ葉色のネクタイをしめた小柄な老人」という風に老人についての説明が再度なされている。

場面③において読者自身にも願いがことを考えさせたいならば「可愛い妖精のお嬢さん」という言葉を付け加えることはないだろう。老人の言葉の宛先がより顕著に表れることになり、あくまで彼女に対して言った老人の台詞であることが強調される。

そして、「どこかの暗闇の中で」が付け加えられることで彼女が二十歳の誕生日に遭遇した場面がそのまま思い起こされているわけではないことが明確になる。彼女が二十歳の誕生日に願いがことをした場所はお店の六〇四号室であり、決して暗闇ではない。ここで「どこかの暗闇の中で」という風に表現されることで、この台詞の挿入は彼女の過去の出来事そのものではなく、不特定の語り手によって再構成されたものということが明確になる。過去の出来事そのものでないものを再構成して挿入することで、不特定の語り手は、この老人の台詞に事実を超えて独り歩きしてしまうくらいの力を与えていることが分かる。

また、他にもいくら彼女と老人はやり取りをしているのにもかかわらず、場面③において挿入される部分は極めて短い。「ひとつだけ。あとになって思い直してひっこめることはできないからね」という台詞と、それを念押すための「しかしたったひとつだから、よくよく考えた方がいいよ。」という台詞のみである。

五十嵐淳氏は「『老人』はそれらすべてを理解している存在である。だから、『一番外側』の語り手は『老人』のセリフを語ってこの小説を締めくくる。『小説全体を統括している『機能としての語り手』』は、『老人』として『二十歳の誕生日』に登場しつつ、人生の一回性を強調して語りを終えるのである。」¹²⁾と主張しており、続けて佐野正俊氏は「人生はその一回性だけが問題なのではない。人生の取り替え不可能性こそが問題なのである。」¹³⁾と展開する。

しかし、人生の一回性を強調しているわけではない。「ひとつだけ」で「ひっこめることはできない」ということは、願いがとが本当に叶うことを強調している。複数だと叶わないということが、あたかも「ひとつだけ」なら叶うというような錯覚をもたらし、「ひっこめることができない」ということは願いがとが叶うことを前提に話が進められているのである。つまり、この二つの台詞が意図的に選択されて場面③に挿入されることで、老人の願いがとを叶えるという話の信憑性が高まっている。

場面③を設定することで、彼女を束縛してしまった老人の

台詞をより強調し、そこでも彼女の願いがとについて考えさせる。読者が彼女の願いがとについて考えてしまうのはこれらの影響である。

四 まとめ

本作品では場面①と場面②において類似したレトリックが存在しており、それが場面を超えて繰り返されることで、彼女が変化する可能性が示唆されている。

場面③では老人の発言が語り手によって再挿入されることで発言の信憑性を高めるとともに、彼女が老人の台詞に束縛されていることを浮き彫りにする。これは場面③の語り手を老人にするのではなく、自由間接話法によって語り手が代弁することで可能になっている。

- (1) 深津謙一郎「『バースデイ・ガール』——『個』を損なう物語の在りか」(『村上春樹と二十一世紀』おうふう二〇一六・九) 一七〇頁。
- (2) 前掲「『バースデイ・ガール』——『個』を損なう物語の在りか」一七三頁。
- (3) 大木志門「教材研究としての村上春樹『バースデイ・ガール』再論——『ブルーサイド』と『三十五歳問題』を手がかりに」(『山梨大学教育学部紀要』二〇一七・三) 一四頁。
- (4) 前掲「教材研究としての村上春樹『バースデイ・ガール』

- ール』再論——『プールサイド』と『三十五歳問題』
を手がかりに」一四頁。
- (5) 前掲「教材研究としての村上春樹『バースデイ・ガ
ール』再論——『プールサイド』と『三十五歳問題』
を手がかりに」一五頁。
- (6) 西田谷洋「エコーとユーモア——村上春樹『バース
デイ・ガール』——」（『日本文学』二〇一七・一）
五一頁。
- (7) 前掲「『バースデイ・ガール』——『個』を損なう
物語の在りか」一七三頁。
- (8) 前掲「エコーとユーモア——村上春樹『バースデイ
・ガール』——」四九頁。
- (9) 前掲「エコーとユーモア——村上春樹『バースデイ
・ガール』——」五一頁。
- (10) 橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩学 日
本語と中国語からのナラトロジー』（水声社二〇一
四・九）三四二頁。
- (11) 前掲「エコーとユーモア——村上春樹『バースデイ
・ガール』——」五四頁。
- (12) 五十嵐淳「村上春樹の教科書作品をどう読むか——
小説『バースデイ・ガール』の教材分析——」（『研
究紀要』二〇〇八・）六三頁。
- (13) 佐野正俊「村上春樹『バースデイ・ガール』の教材
研究のために——〈語り〉が生成する「僕」の物語

付記

を読む——」（『日本文学』二〇一〇・八）六二頁。
本稿は、二〇一六年度富山大学卒業論文「教材『バ
ースデイ・ガール』（村上春樹）の研究——文学研究と
国語科教育学研究の連携試論——」の一部を改稿した
ものである。

（とうかい・よしひと 富山大学院生）